

今回の IPPNW バーゼル大会の参加は、私にとって感慨深いものになりました。誤解を恐れず簡単に言うと、IPPNWの日本支部(JPPNW)が設立時どちらかという核戦争には反対するが核抑止論を容認する矛盾した立場にあり、私たちは、JPPNWとは一線を画さざるをえませんでした。

核抑止論を批判する IPPNW指導部（当初は核実験禁止こそが核戦争防止につながる有効な方法であるという立場でしたが）は、私たちに共鳴し世界大会には、オブザーバーとして参加を認めてきましたが、ワークショップを持つことはできず、私たちは、自由討論の中で核廃絶こそが核戦争防止の唯一の有効な道筋であると繰り返し主張するしかありませんでした。

今回、武田勝文先生をはじめ反核医師の会の代表世話人、事務局の方がたの努力で、反核医師の会としてワークショップを持つことができたことは、長年の取り組みの成果だと感激しています。その後オバマ発言を待つまでもなく IPPNW は、核戦争防止のためには、核廃絶しかないとまとまりましたが、その経過ではアメリカの核政策「アメリカの核先制使用と核兵器保持は許されるが他の国の保持と先制使用は認めない」というダブルスタンダードとイラク戦争での大量破壊兵器のでっちあげの問題が大きな役割を果たしており、今大会でも、各国の指導者は、「核兵器は人道に反し、どの国も核兵器を使用することも持つこともできない」というシングルスタンダードを明らかにしていました。しかし、核兵器の悲惨な被害が十分浸透した結果ではない。という認識が私にはあり、核兵器の非人道的な結果をだれよりも（唯一）体験している日本の被爆者の方々の経験を明確にしている原爆認定訴訟の実際を世界に広げることが大切だと考えてきました。ワークショップが「世界の被爆者」という名前で開かれ、私は、原爆症認定をめぐる日本政府の理不尽な基準の不当性（急性期症状があってもDS86による被ばく線量の計算を優先すること。癌があっても原因確率計算を優先すること。）と被爆者の悲惨な体験が核廃絶を希求していることを紹介しました。

今後この問題での討議ができる道が開けたと喜んでいますが。また、ワークショップのなかで核実験の被害者に対する政府の立場は当初どの国でも同様に軍事機密の問題もあり、核による被害を認めようとしないという点で一致しており核兵器の悲惨さを容認する政府は同時に核兵器開発でも非人間性を必然的に示していると感じました。